

[ラルフ・W・ハリス]「聖霊」

VII. 聖霊のバプテスマの最初のしるし

使徒行伝 2:14、9:17、コリント人への第一の手紙 14:18、
使徒行伝 10:44-46、19:6

聖霊のバプテスマについて最も議論される点は、多分ペンテコステの信者たちによって信じられているように、聖霊が、満たしの力をもって臨むのは、それを受ける信者が神の超自然的な力により、異言を語るという事実によって証明されるという確信である。ほかの福音派のクリスチャンたちは、聖霊のバプテスマを信じているが、彼らはそれは何かほかのしるしによって証明されると信じている。彼らは異言を語ることが今日のためのものであるということに賛同しない。



ある福音派のクリスチャンたちは、聖霊のバプテスマは信者の生活の中に結ぶ「御霊の実」によって証明されると信じている。この実は信者の生活の中に聖霊を持つことによって結ばれることは事実である。しかし、この実は、聖霊のバプテスマを受けても、受けなくても結ばれるべきである。

正しい解答を見いだすためには御言葉をたずね、紀元1世紀において人々が聖霊のバプテスマを受け、または満たされた時、何が起こったかを見いだす必要がある。最も助けとなる部分は、当時の出来事を記録した使徒行伝である。初代教会の記録を捜すことによって、私たちがよって立つべき信仰の標準を見いだすことが出来る。

もちろん、今日におけるこの現象は、単なる模倣に過ぎないと言う人々がいるであろう。彼らはそれらをサタンのわざに帰するかも知れない。サタンが超自然的な働きをすることは真実であるが、それらのしるしは決して神に栄光を帰し、またキリストの御名（みな）をほめたたえるものではないということも真実である。

一方、聖霊に満たされた数限りない人たちは、その経験がもたらした霊的变化を証しすることが出来る。キリストをさらに身近に感ずるようになるのである。聖霊のバプテスマを受けた人は、キリストと彼の言葉への愛に満たされる。彼はキリストと御国のために熱

心になる。サタンは決してそのような結果をうみ出すことを願わない。

ペンテコステ信仰の反対者たちは、異言を語るという経験はただ使徒たちの時代のためのものであり、それ以来、現われていないということを証明しようとしている。しかし、これは事実と反することである。教父たちの多くは一世紀後でさえ、この現象について通常「グロッソラリヤ」(異言)と呼んで、当時のしるしとしている。マルチン・ルーテルやフランシスコ・ザビエルが異言を語ったということも、確かなものとして記録されている。また、ウェスレーやホイットフィールドの回心者たちの上にも、そのことが起こった。事実、教会歴史におけるすべてのリバイバル運動において、大小なりとも存在したようである。

最近、多くの福音的な人たちは、彼らは聖霊のバプテスマの全部の教理を受け入れてはいないけれども、今日、異言を語りうるということを認めるに至っている。このような人たちは、この賜物(たまもの)はすべての人たちのためではないと主張して、限定した言い方をしている。

聖霊の饗宴 (きょうえん)

初代教会の出来事の記録である使徒行伝は、信者が聖霊のバプテスマを受けた時に、何が起こったかという多くの記述を含んでいる。これらの記述を調べることは、その場合に起こったことを明らかにするであろう。このような調査はまた、異言を語るという私たちの信仰が誤っているかどうかを示してくれるであろう。

ペンテコステの日のバプテスマは単に選ばれたグループへのものばかりでなく、個々人に対するものであった。

この個人的な満たしは、ヨハネ 7:37、38 にある「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう」というイエスの約束を成就した。ペンテコステの日、屋上の間にいた一人ひとりの信者は、聖霊に満たされたのである。一人ひとりが異言を語ったのである。多分、ある人々はペンテコステの日には風も火もあったのに、なぜペンテコステの人たちは、異言を語ることだけをしるしとして取り上げるのかと質問するかもしれない。これらの三つのものがともなったことは事実であるが、他の場合にはただ異言を語ることだけが使徒行伝に記録されている。

ある人たちは神が聖霊のバプテスマのしるしとして、異言を語ることを選んだのを不思議に思うかも知れない。ここに手がかりがあるかも知れない。聖霊は人格であり、人格の特質は話す能力である。聖霊が異言によって語ることは、御霊が信者を統御していることを

示している。

その後、使徒行伝10章に、人々が聖霊のバプテスマを受けたほかの場合が記されている。神はこのことをするためにペテロを扱わなければならなかった。ペテロは異邦人に対して偏見を持っていたが、神は彼を用いて、彼らへの福音の門を開いたのである。

その時、すばらしいことが起こった。ペテロが説教をしつづけていた時、突然、彼は何か常ならぬことを聞いたのである。ローマの百卒長コルネリオの家のものたちが異言を語り、神をほめたたえたのであった（使徒10:46）。

後にペテロはエルサレムにおいて、この事件を使徒や兄弟たちに説明する時、彼は明らかにこのことを異邦人の救いとペンテコステの日の聖霊の注ぎとを関係づけている。使徒行伝11章は、コルネリオが自分と家のものたちがいかにして救われるかを知るために、ペテロに使いを遣わしたことを記している。ペテロは起こったことに関して、「私が語り始めた時、聖霊は、はじめ私たちの上にくだったと同じように、彼らの上にくだった」と言った。たしかにペテロは最初の型に従った何かを求めていたのである。

何が起こったであろうか。ペテロが説教している間に、人々は御言葉に迫られて救われたのである。そして直ちに彼らは聖霊によって満たされたのである。それはちょうどペンテコステの日のようであった。

サマリヤ人たちがいかに聖霊のバプテスマを受けたかをちょっとみると（使徒8章）、そこには異言に関する言及が省略されているように見える。異言を語ったという直接的な言及はない。しかし、そこには他の場合と同じように異言を語ったという強力な証拠があった。その用語（「聖霊はまだだれにも下っていなかった」）は、カイザリヤで起こったことを語るのに用いられたものと似ている。

魔術師シモンの行為もまた、そこに起こったことに外部的証拠があったことを強く物語っている。何か外面的なしるしかなかったなら、シモンは何もほしがらなかつたであろう。私たちはそれは異言を語ることであったと信じるのである。ペテロの声明の中に一つの糸口を見いだすことが出来る。「おまえはどうていこの事にあずかることができない。」ギリシャ語では「事」は「言葉」と訳されている。

初代教会において異言を語ったことの第三の場面は、使徒行伝19章に見いだされる。

ここではパウロが信者たちのために祈り、彼らが聖霊のバプテスマを受けたのである。そして、これらの新しく聖霊のバプテスマを受けた人々について再び、「彼らは異言を語り、預言した」と記されている。

このように使徒行伝において人々が聖霊のバプテスマを受けたすべての場合、それらの人々が異言を語ったということが明白に記されているか、あるいは強く示されている。

しるしとしての異言は賜物とは異なる

人々は時々、異言を語ることにに関して混乱してしまう。なぜならば彼らは区別をしないからである。彼らはしるしとしての異言を語ることと、コリント第一の手紙21章にあげられている、霊の賜物としての異言との大きな相違を認めないのである。

異言を語ることの二つの種類の間には、ある類似性がある。本質においては同じであるが、その目的と用法において相違がある。その相違は、使徒行伝に示されているように異言を語る一方の種類と、コリント人への第一の手紙21章に示されているように異言を語る他方の種類とを、比較することによって見られる。

それではそれらの二種類の目的は何であろうか。

聖霊のバプテスマとの関係において異言を語ることは、**聖霊がくだり、完全に所有し制御したことの証拠である。**

しかし、コリント人への第一の手紙12章に記されている「異言」は、異なった目的のためである。それらの目的は語る者の徳を高めることである。それが訳される時には、それは教会全体の徳を高めるのである。